

1 単元について

(1) みらいの授業でめざす学習文化

みらいの学習においても、教科の学習においても、子どもを主体にし生き生きと学び合う学習風土を構築していきたいと考える。また、一人ひとりの考え方や課題への迫り方を大切にし、互いにその子の思いや考え・疑問を認め合い、一人の思いをみんなの思いへ繋げていきたいと考える。この考えは、具体的に言うならば、〇〇君の思いや考えから学習を始めたり、人の考えに共感して付け足したり、また相手の考えも尊重しながら自分の考えを述べるような場面を想定できる。

みらいの学習においては、ただ活動を楽しむだけでなく、その中で生まれる気づきや思いを取り上げ、みんなの課題としていく所が入口となる。そこでは、ただ「楽しかった。」という思いで終わらないような、題材の選定や題材との出会わせ方が重要である。子どもの思いを取り上げて学習を展開するためには、子どものみとりが重要になってくる。低学年の子どもは、自分の思いや考えを表現する力は、まだまだ不十分である。文に書いたり、言葉で話したりする力もたどたどしいものである。書いてある内容や発言の意味がわからず、学習が軌道からずれることも少なくない。そこで、指導者がよく子どもの動きをみとり、子どもの学習を的確にサポートしたり、整理する必要が出てくる。こういう入門期における具体的でわかりやすい支援の中から、自分達の学習を子ども達が会得し、その形態に慣れるとともに、少しずつ自信を持ち、自分達の学習を意識し始める。この時に指導者や子ども達は、学習文化の萌芽を感じ始める。

(2) 食を通して子どもに学んでほしいこと

子ども達は、自分達で調理した料理や栽培し育てた野菜に対して愛着をもつ。それらの食べ物は、一般的にスーパーで販売されている食品とは違う大切なものと感じている。自分達の食べ物を食べたり、だれかに食べてもらったり、食べ方を学んだりする中で、自分と周りの人とのかかわりや繋がりが生まれる。子ども同士の繋がりはもちろんであるが、ゲストティーチャーや見学先で出会った人・さらに応援してくれる保護者とのかかわりもある。出会う人には、それぞれに人柄やこだわりがあり、ひたむきに働くたくましさやみんなを喜ばせようと励む優しさ、さらに仕事を生きがいをもち取り組む誇りがある。そのようなものに子どもが一人ひとりその子なりに接することで、自分の生き方をふりかえり、太らせることができると思う。このように、食そのものを学習するというよりも、食を通して生まれてくる問題について考えることで、学びを展開していきたいと考えている。

(3) 子どもについて(複式学級でめざす学習文化)

大切にしていきたいことは、自立と共生である。

国語と算数の学習では、直接指導・間接指導を並行して授業をしたり、同時に間接指導を行うことがほとんどである。そういうことを考えると、自分達で学習を進めていく力は、1年生から培わなくてはならないものである。そのことを視野に入れて子どもを育てていく時、異学年同時同一学習を基本とする「みらい」の学習においても、考えるべきことはある。まず、子どもを前面に出し、子ども達で学習を進めていける場面を少しずつ増やしていかなくてはならない。最初は、部分的に取り入れたり、2年生が前に出ることになるが、次第に1年生にも役割を分担させていく。このようにすることで、1年生は2年生から学習のやり方を学ぶことができる。板書を見たり話し方を聞

いたりする中で自然に言葉を覚えたり、発表の仕方を身に付けていく。また異学年のかかわりを個人レベルでも取り入れていく。本校の複式学級は、基本的にどの学年も定員が同じであるから、ペアを作りやすい。1年生は2年生から学び、2年生は1年生に教えることで学ぶ。互いに刺激し合い高まる。複式の自立は、互いにかかわることや自分達で学習を進めようとする所から始まる。その姿が、子ども達が共生している姿であり、複式学級の学習文化であると考えます。

次に、意識していきたいことは、**表現**である。子ども同士で学習を進める場合、子ども相互にうまくコミュニケーションをとれないことには、学習が成立しない。しかし、低学年の子どもにとって、子ども同士でコミュニケーションをとることは、なかなか難しいことである。そこで一人ひとりが表現力をつけること・話をよく聞き、相手の考えを認めようとする態度が大切になってくる。小集団であるから、一人ひとりがその力をつけなければ、2、3人で学習が進んでいくことになったり、学習が停滞することになりかねない。一人ひとりにたいしてその場その場で支援や助言をしながら、自信をもって学習に参加できるような子どもを育てなくてはならない。各教科や朝の会の時間の日直のお話も、自分の思いを表現し伝え合う大切な場と位置付けて指導している。

(4) 単元の内容および目標

食をテーマとして展開する今回の学習内容は、本校の「みらい学習内容表」にあてはめて考えてみると、次の内容とリンクする部分が多い。

ネイチャー	
身近な自然に浸る中で、自然の素晴らしさを感じ取り、自分にとっての自然観を作る。	
動植物	・自然の動植物を観察したり、育てたりすることで、動植物の生態や特性を知る。
生産（ものづくり）	
ものをつくりだす活動を通し、生産の喜びを味わう。	
労働	ものをつくり出す楽しさを味わったりしながら活動し、協力することの大切さに気づく。
生活空間	身近な生活の場に興味をもってかかわり、目的に合ったものを工夫し、よりよい生活空間をつくり出す。

上記以外にも、「なかま」や「共生・生命」等にも繋がる部分はあると考えている。

単元の目標は、

食べ物をとりまく様々なことがらに興味・関心をもち、食生活と自分とのかかわりをより主体的なものにすることができる。

みんなで考えたり、活動したりすることに価値や喜びを見出し、まわりの人や事象とのかかわりの中で自分の生活に自信やはりをもつことができる。

と設定した。

単元内容については、1年間を通じて取り組みつづける内容と、学期毎の核となる内容に分けて取り組んだ。まず、学習園においては、野菜の栽培を続けた。収穫物については、「調理して食べる。」と「無人販売する。」と「お世話になった人にあげる。」の3つの方法をとった。核となる活動は、1学期は「ぱん工場の見学とパンづくり体験」であり、2学期は「手打ちうどんづくりの体験と製麺所の見学」である。3学期については、子ども達の興味が製麺所で作られていたラーメンに向いているのでそこになるか、あるいは、無人販売で得たお金をどう使うかの話し合いによっては、お世話になった人を招待したパーティーのような形になる可能性もある。このような学習の展開状況を「2：実践の考察」の中で授業記録の抜粋も入れながら、もう少し詳しく述べていきたい。

2 実践の考察

前項1の(3)子どもについて(複式学級でめざす学習文化)の項で述べた自立と共生及び表現という観点について、授業をもとにしてもう少し具体的に考えてみることにする。

(1) 自立と共生(質の高いかかわりあいをめざして)

研究会の授業においては、前半は、1年生の子どもが司会をし、2年生の子どもが移動黒板に記録するという形をとった。子ども同士あるいは、異学年同士のかかわりあいをよりとれるようにと考え、1年と2年を混合した8人グループを2つ作り自分達で学習を進めるような形態をとったわけである。司会係が、より質の高い話し合いをめざして、話し合いをガイドし、出た意見をみんなのアドバイスをもらいつつ、黒板にまとめていったわけである。互いに認め合いながら、自分達で学習を進めようとする姿、言い換えれば自立する姿が、低学年の子どもではあるが下記にあげた授業記録の中に認められると考えている。

授業記録の抜粋(8人グループA)

司会	機械打ちのいいところを言って下さい	司会	つけたしでもありませんか。
C 1	機械は力が強くて、人にはすぐにできないこともできる。	C 8	だれだか忘れたんだけど、同じ太さに切れるに付け足して、自分の包丁とかで切ったら形が合わなくてうまくできないけど機械でやると機械が切ってくれるからきれいに切れる。
T 1	人より早くできるって書く?	C 9	始めからできるし、失敗しないでできるからいいと思う。
C 2	人って漢字で書いて。	司会	つけたしない。
C 3	強いけどじゃなくて、強いからの方がいい。	C 10	機械で大きい方を使ったら、いっぱい作れるから、大きい方の機械を作ったらいい。
C 4	言ってもいい。人だったら100人分の粉を混ぜるのはしんどいけど、機械だったら楽にできる。	T 3	じゃあ黒板に出ているのは、「機械だといっぱい作れるからいい。同じ太さに切れるからいい。」というのですね。どうしてそれがいいところかな。わけを話し合ってください。
司会	司会が言ってもいいですか。	C 11	(板書をさして。)白いチョークで意見を書いて、黄色でわけを書いたらいい。
C 5	(いいです。)		
司会	冷蔵庫が大きいから、うどんをいっぱい入れられるからいい。		
C 6	機械だったら、うどんが同じ太さになるから役に立つ。		
C 7	福助製麺所のように、大中小と3つぐらい機械を置いていたら、1つぐらい機械が壊れても、残った機械でうどんを作れる。		

このように、1年生の司会の子どもはグループの人を指名し意見をださせようとしている。また自分が言いたいことを思いついた時にはみんなにことわって述べている。さらに、移動黒板に板書する記録係に対しては、漢字を使うことや色分けしてまとめること等のアドバイスを出している子どももいる。

(2) 表現

朝の会での日直のお話と、お話に対するおたずねは、子ども達にとって楽しい時間である。子どもによっては、「2つ言ってもいいですか。3つ言ってもいいですか。」と言っているお尋ねをする子どももいる。それが、みらいの時間の話し合いの授業にも繋がっている。

次の授業記録は、研究会の5日後に行ったみらいの学習の授業記録の一部である。

<p>C 2 8 あの機械が自動で動いて休めるっていても、休めないと思う。そのままほっておいたら、機械は力があるからすぐにうどんができてしまうから、もううどんができていのに、機械を止めずにほっておいたら、うどんが失敗してしまうから。だからこの前に見学に行った時も、塩水と粉をこんなに機械で混ぜている時も休んでなかった。</p> <p>T 1 1 機械を操作したりで忙しいから、自動的にほできないっていうこと。</p> <p>C 2 9 私は、手打ちでも汚れていたら体に悪いものがうどんに入ると思う。</p> <p>C 3 0 麺棒とかなべとか・・・。</p> <p>C 3 1 ぼくは、一番始めに機械を使う時に何分とか時計で計っておいたら、何分できるとか分かるから、それやったらいいと思う。まず始めに時計で何分か見ておいて、ストップウォッチで計っておいて、ピーって鳴ったら機械をストップ</p>	<p>させたらいい。</p> <p>C 3 2 ゆでるのに機械だとすぐにできると言うけどね、でもゆでた後に水でやって袋に入れてってやらなくちゃいけない。岡本先生のだとゆでたら直ぐに食べられる。</p> <p>C 3 3 岡本先生の方で、製麺所の方だと機械でやっているけど、手打ちの方は自分でできるからおもしろい。</p> <p>C 3 4 私は、製麺所の方がいいと思う。手打ちのうどんはおいしいのはおいしいんだけど、製麺所のうどんの方はやわらかくて、お店で売っているみたいだから、作って食べるのにやわらかい方がいいと思います。</p> <p>T 1 2 こっちの方が普段食べているうどんの味でゆりなちゃんは好きなんやな。</p> <p>C 3 5 2つあるので言ってもいいですか。 1つめは福助さんのは、ゆでて袋に入れるのがちょっとめんどくさくて、冷蔵</p>
---	--

この記録のように、子ども達は、自分の考えを相手に伝えようと励んでいる。そのためにC 2 8のように意見を詳しく述べたり、見学時の様子を根拠にしたりしている。またC 3 3やC 3 4のようにまず結論を述べ次に根拠を述べて、自分の意見を分かりやすく人に伝えるテクニックも身につけてきている子どももいる。

(3) 着目児について

<p>K君 1年</p>	<p>今回の学習の中での作文には、うどんづくりの道具や機械のことがたくさん登場する。また発言は多くはないが、その内容も機械のことが多い。しかし、感覚的にひらめきも少なくない。うどんの学習の終末では、「おじさんはおいしく食べてる笑顔がすきと思っている。」という作文を書いた。</p>
<p>Hさん 2年</p>	<p>手打ちうどんにこだわりを持ち続けている。理由は心がこもっていることや自分で作る楽しみである。自分の考えを少しずつ自信を持って言えるようになってきた。</p>

3 今後の課題と展望

子ども達には、少しずつ自立・共生そして表現の力がついてきている。単元の学習の中でタイムリーな活動の場や話し合いの場を設定することや子どもに切実感のあるテーマを組んでいくことが大切である。子ども一人ひとりに力をつけるために、個々が生かされる場を組み、成就感が次の活動への自信となるように考えて、3学期の学習も展開していきたいと考えている。

4 実践研究テーマの設定

複式学級として、子ども同士のより質の高いかわりをめざすことが、上記3の課題や展望に繋がると考える。そのために来年度は、どんな手立てや支援が必要かを考えて実践していきたいと考える。